

小島直記
伝記文学全集

任記文字全集

第七卷

島直

江苏工业学院图书馆
藏书章

中央公論社

小島直記伝記文学全集

第七卷

定価 三四〇〇円

昭和六十二年四月十日印刷
昭和六十二年四月二十日発行

著 者 小島直記

発行者 嶋中鵬二

印刷者 小林 清

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七

振替 東京二―三四

©一九八七 検印廃止

ISBN4-12-402587-4

小島直記伝記文学全集 第七卷 目次

松永安左エ門の生涯

序 章 電力界以前

第一章 電力界へ

原理原則 21 アドバタイジング 23 コンビ
復活 28 福博電気軌道 32 九州電燈鉄道 43

第二章 政治家

代議士 47 近衛文麿 50 質問演説 54

第三章 東邦電力前史

三本の動脈 60 大同電力 66 関西電気 69

第四章 東邦電力時代

経営理念の確立 72 外債 77 山登り 79

第五章 電力攻防戦

ムッソリーニ式 83 東京電力 87 東京電燈
略史 89 東京電燈攻撃 96

83

72

60

47

21

11

第六章 電力統制

98

五大電力 98 「電力国営反対論」 102
業調査会 104 電力連盟 107 電気事

第七章 還 暦

109

茶道入門 109 還暦 118

第八章 電力国家管理

127

電力界の危機 127 頼母木桂吉案 128 長崎事
件 131 永井柳太郎案 136 桃介長逝 141

第九章 引 退

148

陰影とニユアンス 148 電力業界への締めつ
け 156 松永の反対演説 162

第十章 耳 庵

169

柳瀬山莊 169 伊豆堂ヶ島 193 出盧 200

第十一章 電力再編成問題

205

『折に触れて』 205 会長 207 四対一 223
銀座電力局 233

第十二章 松永路線

小坂順造 242 対決 246 太田垣士郎 265

横山通夫 272 木川田一隆 280

第十三章 電力の鬼

脅迫 291 夢声対談 305 喜寿 323

第十四章 「松永を葬れ」

公益委廃止 340 電源開発会社 342 東京松泉

会 349

第十五章 不^{フニックス}死^{グス}鳥

『閑忙日描』 359 電力中央研究所 370 二つの

対談 384

第十六章 出 会 い

八十青年の海外視察 392 アルマール・シャハ

ト 396 アーノルド・ジョセフ・トインビー 406

第十七章 恒心恒産

故人今人 429 心遣い 434 「九十歳の日記」 442

カメラ・アイ 447 アスベルキルス病 454

242

291

340

359

392

429

あ
と
が
き

略
年
譜

469

465

小島直記伝記文学全集

第七卷

松永安左エ門の生涯

松永安左エ門の生涯

序章 電力界以前

一

松永安左エ門は、明治八年（一八七五）十二月一日、長崎県の杵岐ノ島石田村石田に生まれた。父は二代目安左エ門（二十歳）、母はミス（二十一歳）である。

その出産は母の実家で行われ、その使いが松永家に知らせをもたらしたときのことを、松永は自叙伝『玄海の濤に洗はれて』の中で次のように語っている。

「その日は、私の宅は酒造家の常として、十二月朔日でお竈祭がある。使用人の全部が大倉の土間に藁を敷き、その上で酒土器、お膳、大盤の肴、祖父は自慢の謡曲を、高々と謡っているうちに、母の里の急使は吉報を齎らして、その祝いの席に闖入した。謡はばかりと止んで、祖父も祖母も一同の使用人も立ち上って舞い出した。男の子か、そうか、それじゃ、芽出度芽出度の名をつける、亀之助はどうじゃ、亀じゃ、亀之助じゃというのが、生れた日に祖父母の踊り狂ずる間に満場一致即決された命名であった」

松永家は、もとは「安武」という姓であったという。昭和二十七年、松永耳庵七十八歳のときに、松永耳庵刊行会から、自叙伝『松永安左エ門』という本が出された。そこに載った系図では、

最初に、天明二年（一七八二）に没した安武安左エ門という人が載っている。そしてその次の代に、松永丈左エ門、天保十年（一八三九）に没した人が出ていて、姓は松永と変わっている。

その改姓の説、なぜ姓を変えたかについては二説あって、一つは、子供が育たぬために、子供が育つようにという願いからというもの、いま一つは、松浦藩士から「松永」という姓をもらったという説である。後世からは、真偽いずれとも断定しがたい。

丈左エ門の次に当主となったのが、弘化四年（一八四七）に没した松永勢左エ門という人である。勢左エ門には、第一夫人、第二夫人、第三夫人がいた。

第一夫人の名前はわからないが、娘だけ三人生まれた。第二夫人も名前がわからないが、貞太郎という息子が生まれ、その貞太郎が松永本家を継いだ。第三夫人は、浄といったが、その息子安十郎が、本家の貞太郎を支えて非常な功労があった。

というのも、貞太郎は学者肌で、生活能力がない。一心に働いて本家を支えたのは安十郎の力によるが、彼は三十一歳に独立しようとしたとき、兄貞太郎は、その功労ある安十郎に、たった筵一枚しか分けてやらなかったといわれる。

安十郎の妻はかめという。安十郎、かめの夫妻は子供がないので、安十郎の弟、太田家を継いだ太治郎の次男吉太郎を養子とした。この安十郎が初代安左エ門を名乗り、吉太郎は二代目安左エ門となるのである。安十郎は筵一枚をもとに、酒造業、呉服雜貨商、漁業の網元、船舶運送業、貸金業、山林、田畑、地主などで、営々として松永家の家産を築き上げた。

明治十五年（一八八二）初代安左エ門は隠居し、亀之助の父が二十七歳で家督を継ぎ、二代目安左エ門となった。このとき亀之助は八歳である。

その翌十六年、初代安左エ門は五十七歳で逝去した。そしてさらにそれから十年たって、二十

六年（一八九三）、二代目安左エ門も三十八歳の若さで逝去したのである。このとき亀之助は十九歳、家督を継ぐべき身であったが、ちょうど慶応義塾在学中であった。

二

亀之助は二十二年九月、十五歳のときに慶応義塾に入学している。

ところが、その翌年コレラにかかり、死線をたどったが、やっと治って、郷里で静養した。そして、二十四年、十七歳のときに慶応に戻ったが、二十五年の暮れに父の病氣ということを聞き、慌てて帰省し、二十六年早々に父の死に遭ったわけである。亀之助は家督を相続し、三代目安左エ門を名乗った。

それから数年家業に当たった後、二十八年、二十一歳の秋にまた慶応義塾に戻った。そして翌二十九年の十月、下宿から寄宿舎に移り、その一室に熊の皮を敷き、「熊の皮に座って相場をする」といって有名になった。

ちょうどこのころ、福沢諭吉は、健康のために朝早く散歩する習慣であったが、その福沢について学生たちが散歩するようになって、これを福沢は散歩党と命名した。

安左エ門もその仲間に入ったが、この散歩党に入ったことによって、同じくその散歩に加わっていた福沢桃介と知り合ったのである。これは安左エ門の生涯を決定する重大な出会いであった。

三

桃介は、埼玉県川越の提燈屋岩崎紀一、サダという夫婦の次男坊である。

長男の幾太郎は、小学校だけ出してもらうと、すぐに丁稚奉公に行った。家計が苦しいだけで

なく、もともと凡庸で学問ができなかったからである。

ところが、次男坊の桃介は違っていた。下駄を買ってやる余力がないので、桃介ははだしで学校へ通う。学校の井戸端で足を洗って教室に入り、帰りはまたはだしで家に着き、足を洗って家に上がる。その光景を友達に見られて嘲笑されたが、学科となると、嘲笑した連中は足元にも及ばない。「神童」「天才」という最大級の賛辞を、学校教師にいわれたのである。

しかし、友達に嘲笑されたという体験は、深刻な影響を桃介に与えた。

「友達に笑うけれど仕方がない。大きくなったら金を儲けて、今の貧乏を忘れたいと子供心にもしみじみ思ったものである」

「私は貧乏人の家に生まれたから、富者に対する反抗心が強く、金持ちになつて、金持ちを倒してやろうと、実業界に発心したことの、そもその原型はこのときにつくられた」

そういうこともあって、彼は、油断をしない、工夫を凝らす少年となつた。油断をせず、工夫をしなくては、友達に勝てないと思つたからである。

やがて、近所の人の口聞きで、慶応義塾に入れてもらった。そして福沢家から、次女房子の婿養子にと望まれたのである。

桃介は、「洋行させる」といわれて、その申し出を承諾することにした。

このとき、福沢家から岩崎家に対して、次のようなあいさつがあつた。それは文書の形をとつていて、冒頭に「大意」とある。

本文は、

「一、岩崎桃介を福沢諭吉の養子として貰い受くるのこと。

一、養子は諭吉相続の養子にあらず、諭吉の二女房子へ配偶して別家すること。